

コメント

人のことばと神のことば ——加藤武「CONDITIO HUMANA」へのコメント——

水落 健治

1 本稿の課題は、上記論文に対して筆者の立場から批判とコメントを加えることであるが、筆者はこの論文を読み、様々な点で刺激を受け、触発されることが多かった。そこで以下の論稿では、次の順序で筆者の感じ考えたことがらを述べたいと思う。

まず最初に、上記の論文の意図と内容を筆者の立場から要約し、そこから教えられたことを述べたい。

次に、論文の中で取り上げられているアウグスティヌス（以下 Aug. と略記）のテキストの理解に関連して筆者が感じた疑問ないし問題点を5点ほど指摘したい。

I

2 加藤武「CONDITIO HUMANA——Sonus et Verbum」の主題は、「Aug. の思想における音声 uox と内なることば uerbum との関係を発展史として捉えること」に存する。この課題を実現するために、加藤（以下敬称を略す）は、Aug. の初期から中・後期に至る幾つかの著作を選び、その中から当該問題に関わる特に重要なテキストを抜き出し、それらの箇所を、同時期に書かれた他のテキストのと同連等をも考慮しつつ重点的に解釈して行くことによって、課題に迫ろうとしている。

3 この論文の内容はおよそ次のように要約されよう。

(1) 初期 Aug. は、〈ことば〉と〈声〉の関係を切り離して捉えていたが、次第に両者を密接に結びつけたものとして捉えるに至った。

(2) *De Fide et Symbolo* 3. 3. (A. D. 387) では、

(a) 「神のことば」が不変に留まることを根拠に、「神のことば」の超越的性格が強調されている。

(b) 「人間のことば」と「キリストの〈ことば〉としてのあらわれ」とは、「隠れた意志の signum である」という点で共通であることが指摘されている。

(c) しかし、「人間のことば」は「uerbum と uox との間に断絶がある」という点で「神のことば」と異なっていることが強調されている。

(3) その数年後に書かれた *De Doctrina Christiana*, I. 13.12. (A. D. 396) では

(a) uox と uerbum とが緊密に結びついて来る。

(b) 音声は心のことばとの関連で取り上げられ、「uerbum quod gestamus が sonus になる fit こと」が主張される。

(c) 発語における言語現象がキリストの受肉との関連で「ことばの下降」の観点から取り上げられる (乗り物の比喻)。

(d) そしてこの「ことばの下降」の根拠として「人間の弱さ」が指摘される。

(4) したがって、中期 Aug. は、〈声〉と〈内なることば〉との統一の側面に関心を寄せていたことが明らかとなる。

(5) そして、*De Trinitate* XV. 11.20 が執筆された時期になると、〈ことば〉の思想はさらに深められ、次のことがらが主張される。

(a) *Imago Dei* としての「人間のことば」においても、〈内なることば〉は、〈ことば〉が音声として発せられた後にも不変に留まっていること。

(b) 人間の日常言語 (音声, テキストとしての聖書) の背後に神秘的な言語の層が横たわっていること。

(c) *Imago Dei* としての人間が「ある」を「ある」として語るときに生まれる「人間のことば」の中に、「神のことば」とのある種の相似性が見られること。

(d) したがって、われわれは「人間のことば」の相似性によって「神のことば」にまで到達することが可能であること。

(6) この「人間の中に生まれる〈ことば〉」は、「存在」(*contemplatio*) と「倫理的意志」(*operatio*) の双方にまたがる「対話的世界の言語」である。

(7) したがって、Aug. の神秘体験は「存在の光の彼方から語りかけてくるもの」の声を聴く経験として、〈ことばの経験〉として理解されなければならない。

4 以上簡単に論文の内容を要約したが、まず筆者はこの論文を読み教えられたことがはなはだ多かったことを述べなければならない。とりわけこの論文においては、Aug. が〈ことば〉の問題を *Verbum Dei* との関わりにおいて思索し続けて行ったその道程が鮮やかに描きだされ、Aug. の〈ことば〉に関する思索の流れの全体的見通

しを与えられたことは、筆者にとって大きな喜びであった。

しかしながら、論文を読み終わって改めて考えてみると、筆者には、加藤の論述の中に幾つかの疑問点や問題点が存するように見えるのも事実なのである。そこでわれわれは以下、これらの疑問点や問題点を5つほど指摘しようと思う。

II

A. 「初期 Aug. は〈音声〉と〈内なることば〉の関係を切り離して捉えていた」という命題について

5 加藤は、論文第一章冒頭で、初期 Aug. が〈音声〉と〈内なることば〉との関係を切り離して捉えていた、と述べ、その典拠として *De Dialectica* c. 5¹⁾ を挙げている。この箇所は〈ことば〉のもつ4つのモメントとして *uerbum*, *dictio*, *dicibile*, *res* が指摘されることによって〈音声〉(=*uerbum*)と〈内なることば〉(=*dicibile*)が区別される箇所なのであるが、この書物は、全体として見るならば、むしろ両者の緊密な関係を主張する書物であると考えられる。同書第6章では「〈ことば〉の起源」の問題がいわゆる「擬音語」との関連で展開されるし、これに続く第7章では、「〈ことば〉の力」*uis uerbi* の表題の下に、〈ことば〉がそれを受容する者に「音声」*uox* として働きかける仕方と「意味」*significatio* として働きかける仕方との関連が論じられているからである。この箇所では、たとえば次のような実例が挙げられている。

- (1) ペルシア王 '*Artaxerxes rex*' という語は、それに含まれる多くの '*ks*' という音によって、それを聴く者がこの語の意味を知らない場合でも、何か荒々しい印象 *asperitas* を聴く者に与える。
- (2) *Vergilius, Aeneis* (5. 294ff.) に登場する美少年 '*Euryalus*' は、その名前に含まれる多くの流音によって、何かなめらかな印象 *lenitas* を聴く者に与える。

6 したがって、「初期 Aug. が〈音声〉と〈内なることば〉との関係を切り離して捉えていた」という命題は、現存の *De Dialectica* という著作自体から直接には導き出されないことになる。この点については加藤も十分理解していると考えられるが²⁾、ではこの命題は、初期 Aug. のどの著作のどの箇所について成立するのであろうか。これに関してさし当たり筆者の念頭に浮かぶのは、*De Magistro* の一連の議論である。しかし、もし *De Mag.* (特に後半部) が「言葉の意味(*dicibile*)への傾斜」という立場で書かれているにしても、「*De Dial.* の思想からの変質」がいかにして起

こったかの問題は残るであろう。特に、この変質が Aug. のキリスト教との接触とどのような仕方に関わっているか、という問題は、初期 Aug. のキリスト教受容の問題を考える上で極めて重要なことからであると考えられる³⁾。したがって、筆者は、この点についてもう少し具体的な言及がほしかったと考えるものである。

B. 『信仰と信条』 *De Fide et Symbolo* 3.3-4 のテキストの理解について

7 筆者が感じた第2の疑問は、加藤が、*De Fide et Symbolo* 3.3-4 のテキストと *De Doctrina Christiana* およびそれ以降の著作との対比を若干際立たせすぎているのではないか、という点である。

加藤は、*De Fide.* のテキストを、「言葉の音声と意味 (*dicibile*) との関係を切り離して捉えていた初期 Aug.」と「音声と意味との統一の側面に関心を寄せていた中期 Aug.」との間に位置づけ、このテキストの解釈によって、この時期の Aug. が、——*De Doctr. Christ.* 等とは異なって——「*uerbum Dei* の超越的性格」と「*uerbum hominum* における音声と内なることばの断絶」を主張していたことを述べている。

しかし筆者には、このテキストにおいては上記の2点は加藤が考えるほどには強調されておらず、このテキストはむしろ *De Doctrina Christiana* と内容的な親近性をもつように思えるのである。

8 そのことの根拠として考えられことは幾つかあるが、ここでは特に明確なことがらとして、次の2点を指摘しておきたい。

- (1) Aug. は確かにこの箇所で「変わることがない神のことば」と「変化をまぬかれない人間のことば」との比較を「ことばが *manere* するか否か」という観点からおこなっている。しかし、これに続く箇所で Aug. は「人間のことばにおいても音声とは別に *manere* するものがある」⁴⁾ ことを明確に指摘している。
- (2) 加藤が「われわれは、音声としてひびくことばを作る (発する) が、生み出すことがない」という訳で引用した箇所 (p. 75, 註7) は、直訳すれば「われわれは音としてのことばを生むのではなく作るものであり、このことばを作るために物体が素材として用いられる」という訳文になる。確かにこの箇所の前半では *gignere* と *facere* という語によって「神のことば」と「人間のことば」との相違が述べられている。しかし後半部では、われわれのもとに *manere* するものが物体 *corpus* を素材 *materia* として用いることが述べられており、この記述は *De*

Doctrina Christiana の「乗り物」uehiculum の比喩や「受肉」incarnatio の言及へとつながるものと考えられる。

これらの事実を考慮に入れるとき、筆者は、このテキストを *De Doctr.* などとの関連で理解すべきだと考えるのであるが、どうであろうか。

C. ことばが生成される過程を示す種々の用語について

9 第3に、加藤の論文では、発語行為を示す Aug. の微妙な用語の意味とそれらの相互関係のおさえ方が、いまだし不十分であるように思われる。

中期～後期の Aug. は、人間の発語行為と言葉の受容行為との中にある種の段階ないし過程を考え、それを様々な用語で表現している。この現象は、すでに *De Fide.* にも見いだされるし⁵⁾、また *De Doctr.* では、これがさらに深められた形で現われている。たとえば *De Doctr.* II. 2. 3 では、人間の発する言葉 etc. が〈与えられたしるし〉signa data と名づけられ、こう語られている。

〈与えられたしるし〉とは、何であれ生けるものが、感覚されたものであれ理解されたものであれ、みずからの魂の動きを可能なかぎり示すために、お互いに与えあうものことである。われわれが意味表示する、すなわちしるしを与える理由は、しるしを与える者が、魂に保っているものを引き出し、他者の魂の中に投げ渡すためにほかならない⁶⁾。

この箇所を見ると、言葉を発する者が自らのうちに保っているものが

「感覚されたものであれ理解されたものであれ」uel *sensa aut intellecta*

「魂の動き」*motus animi*

「魂に保っているもの」*id quod animo gerit*

と呼ばれ、発語という行為が、

「魂に保っているものを引き出す」*depromere*

「意味表示する、すなわちしるしを与える」*significare = signum dare*

「他者の魂の中に投げ渡す」*traicere in alterius animum*

などの用語を用いて表現されている。

10 しかも Aug. はこれらの語を恣意的にはなく、かなりの論理的一貫性をもって用いていると考えられる。例えば「魂の動き」という語については、それが「思惟」*cogitatio* であることが、*De Doctr. Christ.* I. 6. 6 でこう言われている。

‘de-us’ という二つの音節が耳を打つことによって実際に神ご自身が認識される

わけではない。しかしその音は、耳に触れたときラテン語を話すすべての人を動かす、何か極めて卓越した不死なる本性を思惟するようにと促すのである⁷⁾。

そして、*De Trin.* XV. 16. 25 に至ると、この「思惟」について

神のみことばは「神の思惟」とは呼ばれない⁸⁾

と語られることになるのである。

11 上に掲げたのは、ひとつの実例でしかないが、われわれは、このような事実を考えると、Aug. の言語理論を把握するに際しての用語の分析の重要性を知らされるのである。したがって、もし本論文の意図が

「Aug. の思想における音声 *uox* と内なることば *uerbum* との関係を発展史として捉える」(第 2 節)

という点に存するのだとすると、上記の用語の正確な意味と相互関連を Aug. の著作の時間的経過の中で把握して、その上で議論を展開した方が、議論がさらに説得力をもったのではないかとと思われる。たとえば、加藤が「内なることば」と呼ぶものは、先の「魂の動き」、「感覚されたものであれ理解されたものであれ」、「魂に保っているもの」などの語と内容的にどのように関わっているのだろうか。

D. 「上昇の道」と「下降の道」との相互関連について

12 第 4 の疑問点は、Aug. が「ことば」の問題を考察して行くに際しての思惟方法に関するものである。

Aug. は——初期の *De Dialectica* などを除いて——「ことば」の問題を「神のみことば」との関連において思索し続けて行った。この意味で、Aug. の言語思想は、確かに「人間のことば」と「神のみことば」との間の弁証法において成立しているということが出来る。しかし、Aug. の個々のテキストについて見ると、それらのテキストには、(1)「神のみことば」を明らかにするために「人間のことば」の事例を用いて説明している箇所と、(2)「人間のことば」の本性を明らかにするために「神のみことば」を援用する箇所との 2 種類のものがあることが分かる。例えば、加藤が引用する *De Fide et Symbolo* 3. 3-4 のテキストでは「信条の教義についての講解」が意図されており、したがって Aug. はここで「人間のことば」を手がかりに「神のことば」を明らかにしようとしていることになる。また、*De Doctr.* 第 II 巻冒頭などは明らかに、「人間のことば」の解明に焦点が当てられ、それとの関連で「神のみことば」が引き出されてくるテキストと考えられよう。さらにまた、*De Trin.* 第 XV 巻は、この著作

全体の構成からして、「神のみことば」を解明するために「人間のことば」とのアナログが用いられた箇所と理解される。

13 このように見てくると、Aug. の〈ことば〉の思想を「発展史として」捉えるためには、扱われるテキストがこれら2種類のテキストの何れに属するものであるかの理解がその根底になければならないと考えられる。すなわち、Aug. の〈ことば〉の思想の展開は、「人間のことば」ないし「神のみことば」に関する「思索内容の展開」として捉えられるだけではなく、同時に、「思索方法の展開」としても捉えられなければならないのである。Aug. の〈ことば〉に関する思索の内容が、「人間のことばから神のみことばへ」という《上昇の道》と「神のみことばから人間のことばへ」という《下降の道》との絡み合いにおいてどのように展開して行ったか、そのダイナミックな展開過程が示されることが必要であろう。

E. 人間の中に生まれる〈ことば〉が「対話的世界の言語」であるということについて

14 最後に、*De Trin.* XV. 11. 20 について筆者の感じた疑問を提出しておきたい。加藤は、論文の第三章で *De Trin.* XV. 11. 20 の解釈に基づき次のことを述べている。

- (1) *Imago Dei* としての人間が「ある」を「ある」として語るときに、その人間の中に、「神のことば」とのある種の相似性をもった〈ことば〉が生まれる。
- (2) この「人間の中に生まれる〈ことば〉」は、「存在」(*contemplatio*)と「倫理的意志」(*operatio*)の双方にまたがる「対話的世界の言語」である。
- (3) したがって、Aug. の神秘体験は「存在の光の彼方から語りかけてくるもの」の声を聴く経験として、〈ことばの経験〉として理解されなければならない。

この加藤の理解は、テキストの理解に基礎づけられた優れた観察であり、多くの示唆をわれわれに与えてくれるものである。だが筆者には、加藤が *De Trin.* XV. 11. 20 のテキストの解釈から、「人間のことば」を「対話的世界の言語」として理解するとき、そこに何らかの《飛躍》があるような気がしてならないのである。

15 この箇所では Aug. は、「神のみことば」を考察する予備段階として、まず、神によって造られた *Imago Dei* としての人間の発する〈ことば〉の考察を行なおうとし、この「人間のことば」の中に見いだされる「神のみことば」との〈類似性〉*similitudo* を手掛かりに「神のみことば」への接近を試みている。そしてこの考察は、ふたつの側面において行なわれる。すなわち Aug. は、第1に、

人間の魂の内に留まっている知 *scientia* から「内なることば」が生まれるという事態のなかに「神のみことば」との類似性を認め、そして第 2 に、

人間の行為 *opera* には「ことば」が先行する
という事態のなかに「神のみことば」との類似性を認めているのである。

16 そこで、この第 2 の議論をいまだ詳しく見てみると、そこでの議論は次のような仕方で行なわれていることが分かる。

- (1) 「神のみことば」については、「すべてのものはこれによって造られた」(*Ioh.* 1. 3) と語られている。
- (2) したがって、「神のみことば」は「神の行為」に先行するものである。
- (3) しかるに、人間は何かを行なおうとする場合、自ら行なおうとすることを *cor* の中であらかじめ語ることなしには行なうことができない。
- (4) 聖書の中に「ことばがあらゆる行為のはじまりである」(*Eccli.* 37. 20) と語られるのは、この事態を指している。
- (5) したがって、「人間のことば」もまた「人間の行為」に先行する。
- (6) それゆえ、「神のみことば」と「人間のことば」との類似性は「ことばが行為に先行する」という点にも認められる⁹⁾。

17 この要約から明らかなように、この箇所では Aug. が問題にしているのは、「人間のことばが人間の行為を生み出す」という事態と「神のことがばが神の行為を生み出す」という事態との間の類似関係 *similitudo* なのであり、「神のことがばが人間の行為を生み出す」という事態、ないし「人間のことがばが神の行為を生み出す」という事態なのではない。したがって、この箇所では「行為」*operatio* のことが論じられているというそれだけの理由で、この箇所に「応答という現象」を見、この箇所の「ことば」を「対話的世界の言語」とみなすということは、筆者には、やはりある種の飛躍と思えるのである。もし加藤が、この箇所の議論が上記のようなものであることを踏まえて、それでもなお「対話的世界の言語」の主張を行なっているのだとすれば、筆者には、その根拠をもう少し示してほしいと思われるのであるがいかがであろうか。

18 以上われわれは、加藤の論文についての疑問点・問題点を 5 つほど指摘した。これらの中には、筆者の感想めいたものもあったし、また答えることが極めて困難なことがらもあったことは、筆者も十分承知している。だがそれにも拘らず敢えてこれらの

ことがらを指摘したのは、Aug. にとって言語の問題がきわめて重大な問題であることをわれわれが改めて認識し、このささやかな議論を通して研究が少しなりとも進展することを願ってのことである。いずれにせよ、加藤の先駆的研究によって日本における Aug. の言語思想研究に新たな地平が拓かれつつあり、筆者もまた大きな刺激を受けつつあることを、ここに改めて感謝したい。

アウグスティヌスほど、ことばを大切に思想家はすくない。かれの思索の中心にはことばの問題がある。(加藤武『アウグスティヌスの言語論』p. i.)

註

- 1) ここでは、*De Dialectica* の著者問題について論じることはできない。これについては、拙稿『アウグスティヌスと *De Dialectica*——著者問題に関する文献学的考察』(本号所載)を参照のこと。
- 2) 第一章2における次の言葉を参照。「ここで第二に注意すべきは、……音声があるところの中のことばとの係わりにおいてとりあげられていることである。これが『弁証論』など初期の思想に遡るだけでなく、……」
- 3) もし Aug. がキリスト教との接触(回心?)の結果、「音声と内なることばとの結合」を強調する世俗言語学の立場(*De Dial.*)から「内なることば」を強調する立場(*De Mag.*)に移行したのであるとすれば、初期 Aug. のキリスト教理解のひとつの側面が明らかとなる。
- 4) *De Fid. et Symb.* 3. 4. Hoc enim et nos conamur, cum loquimur,Quid enim aliud molimur, nisi animum ipsum nostrum,, cognoscendum et perspicendum animo auditoris inferre: *ut in nobis ipsi quidem maneamus, nec recedamus a nobis, et tamen tale indicium....., proferamus;* (イタリックの箇所注目のこと)
- 5) 前註を参照。
- 6) *De Doctr. Christ.* II.2.3. Data uero signa sunt, quae sibi quaeque uiuentia inuicem dant ad demonstrandos, quantum possunt, motus animi sui uel sensa aut intellecta quaelibet. Nec ulla cuasa est nobis significandi, id est signi dandi, nisi ad depromendum et traiciendum in alterius animum id, quod animo gerit, qui signum dat.
- 7) *Ibid.* I. 6. 6. Non enim re uera in strepitu istarum syllabarum ipse cognoscitur, sed tamen omnes latinae linguae socios, cum aures eorum sonus iste tetegit, *mouet ad cogitandam* excellentissimam quandam inmoremque naturam…… (イタリックは筆者)

- 8) *De Trinitate* XV. 16. 25. Quapropter ita dicitur illud Dei Verbum, ut Dei cogitatio non dicatur.....
- 9) *Ibid.* XV. 11. 20. Animaduertenda est in hoc aenigmate etiam ista Verbi Dei similitudo, quod sicut de illo Verbo dictum est, "Omnia per ipsum facta sunt", ubi Deus per unigenitum Verbum suum praedicatur uniuersa fecisse; ita hominis opera nulla sunt, quae non prius dicantur in corde: unde scriptum est, "Initium omnis operis uerbum" (*Eccli.* 37. 20).

* * *

討論報告（司会者）

泉 治 典

アウグスティヌスはミラノのヴィジョンやオステシアの体験において上からの声を聞くという神秘を経験した。それは「心に聞かれた言葉」である。これによってアウグスティヌスの思索は、「見る」に代わって「聞く」ことを超越者との関わりの第一与件とするに至った。すなわち、アイデアの野を思考の場所として持つことに対して、知と生を人格的關係性のうちに構築することとなったのである。発表者加藤武氏は長い間この問題をめぐって思索を続けて来られ、昨年『アウグスティヌスの言語論』（創文社）を刊行された。そこでは意味の光、喚びかけ、沈黙、対話、讚美、呻き、告白等〈声の現象学〉が探究され、さらに比喩論と解釈学が展開された。加藤氏はアウグスティヌスの著作の中に直接伝達ではなく間接伝達（キルケゴール）を見、テキストを通して対話しつつ、導かれて自らも天上の声を聞こうとする姿勢を示された。かつフッサール、ソシュール、デリダ、ヤコブソンらの言語哲学とも折衝して、哲学の今日的営みを披瀝されたのである。

今回発表の題目〈sonus et verbum〉は、*De doctrina christiana* I, 12「われわれが話す時、心に抱くものが肉の耳を通して聞き手の心の中に滑り込む。すると心に抱く言葉が音声となって (fit sonus verbum), 発語と呼ばれる」から採られた。'et' はたんなる並列ではなく、同一・差異・類似・非類似を含意する。初期の作 *De fide et symbolo* では神の言と人間の言葉との差異が強調されたが、それから3年して書かれた *De doc. chr.* I では、受肉による神の言の人間音声における現在が説かれた。これは神の言と人間の言葉との質的差異を破棄せず、むしろアナログアをおくものであ